

令和6年～7年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会指定研究(2年次) 生徒指導研究会 活動記録

1 基本情報

- (1) 研究主題：共感的な人間関係を築く力をもつ子どもの育成 ～感情の言語化をめざして～
- (2) 領域：生徒指導
- (3) 期 日：令和7年10月10日（金）
- (4) 会 場：糸魚川市立大和川小学校

2 研究の概要

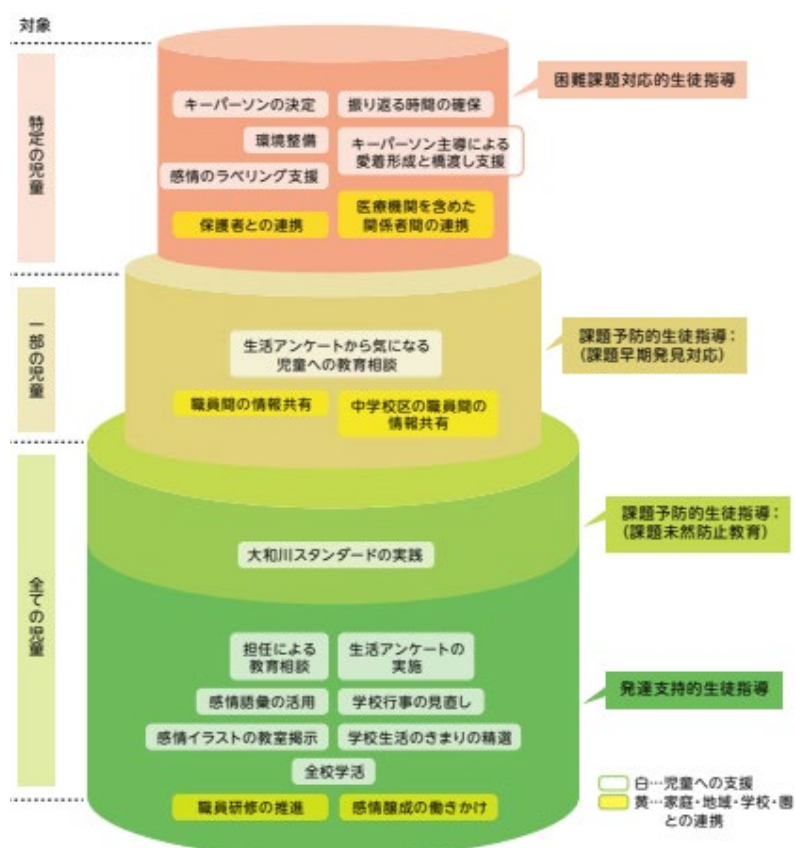
学童期は、人格形成に大切な時期である。学校で多くの友達と直接的・間接的に関わり集団生活を共にすることで、友達の多様性にふれ、共感的な人間関係を作り上げていくことができる。また、毎日学校生活を共にする教師も、子どもの心の育ちにおいて重要な役割を果たすことになる。

当校の児童は、相手の考えや思い、感情を率直に受け止め、認めたり価値付けたりする力が十分備わっているとは言えない。また、不登校、暴言、暴力等の不適応行動を示す児童もいる。

これら児童は、愛着の問題を抱えており、児童が抱える不安や嫌な気持ちを抑えることができなかったり、感情を言語化できなかったりすることが不適応行動の要因となっている。そして、感情の学習が適切な時期に行われなかったり、十分な発達がなされなかったりして感情が未分化な状態であるとも捉えた。

そこで、本研究では、生徒指導提要に示されている生徒指導の重層的支援構造を参考にしながら、共感的な人間関係を築く子どもをはぐくむために、適切な感情の学習の機会をどのように仕組み、支援すればよいかについて探った。

図1 大和川小学校における支援のイメージ図



3 研究の内容

生徒指導提要の「生徒指導の重層的支援構造」では、生徒指導の対象となる範囲を児童生徒に限定している。本研究を実践するにあたり、児童相互や児童と教師との共感的な人間関係を育てるためには、保護者や身近な大人等の相互作用等も重要な役割を果たす。そこで、家庭や地域も研究の対象に加え、次の3つの取組を研究することとした。

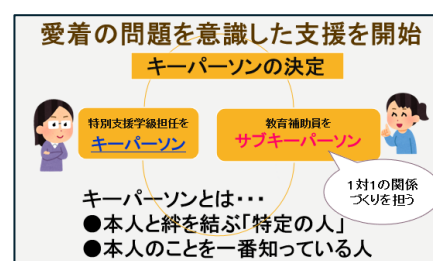
- (1) 個への取組 → 感情の言語化と行動を抑制する力の育成
 (2) 集団への取組 → 学級・学校が安全・安心な風土づくりと共感的な人間関係を築く力の育成
 (3) 家庭・地域・学校・園との連携 → 愛着の醸成や連続性の育成

4 研究の実際

(1) 個への取組

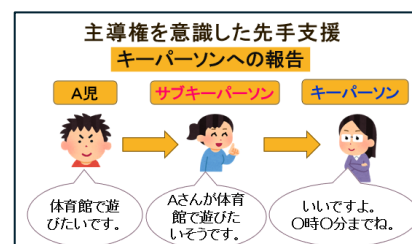
①キーパーソンの決定

常識的生徒指導をしても効果がない場合、愛着の問題があると捉え、早期に関係職員によるケース会議を実施し、個別の支援を行った。その場合、支援を開始する前に、児童と教師との一対一での信頼関係を結ぶため、キーパーソンを決め、困り感や気持ちを受け止め、個別に対応したり、行動を促したりした。キーパーソンとは、本人と絆を結ぶ特定の人、本人のことを一番知っている人のことで、愛着の問題を意識した支援の要となる。担任は他の児童の担任であるため、他の職員をサブキーパーソンとし、一対一の関係を担うこともあった。



②主導権を意識した先手支援

本人の言いなりになって周りの大人が動くことがないよう主導権を意識した先手支援を行った。個別の予定表を作成し、その予定に基づいて活動を行うことを徹底した。さらに、サブキーパーソンからキーパーソンへの報告を徹底することで、あくまでも主導権はキーパーソンが握っていることを意識させた。予定表には流し方や活動へ誘うときの言葉がけについても記載した。



③ポジティブ感情を生じさせる活動の設定

ポジティブ感情を生じさせる活動をあえて設定した。幼児が感情を身に付けるときは、ポジティブ感情が先に、その後、ネガティブ感情が身に付く。サブキーパーソンとの一対一の活動を個別の予定表に意図的に組み込み、サブキーパーソンと一緒に勉強したり遊んだりして「楽しい」「安心だ」という感情をはぐくんだ。



④感情の言語化

さらに、感情の言語化を図った。サブキーパーソンと一対一の活動をしてポジティブ感情が生じたときに、A児に対して「〇〇して楽しいね」「おもしろいね」「気持ちいいね」と感情を言い当て、感情のラベリング支援を丁寧に行った。

⑤行動を抑制する力の育成

ネガティブ感情については、泣いてわめいたり怒ったりするよりも、言葉で表現した方が相手に理解してもらえることができること、自分の気持ちも落ち着くという感覚を意識させた。国語の教科書に出てくる感情の言葉をイラストにしたものや、気持ちを表す色表を用いて、自分の気持ちを他者に伝える活動を根気よく継続した。自分の気持ちを伝えた後には、教師が「分かったよ」

「こんな気持ちだったんだね」「つらかったね」と言葉を添えた。

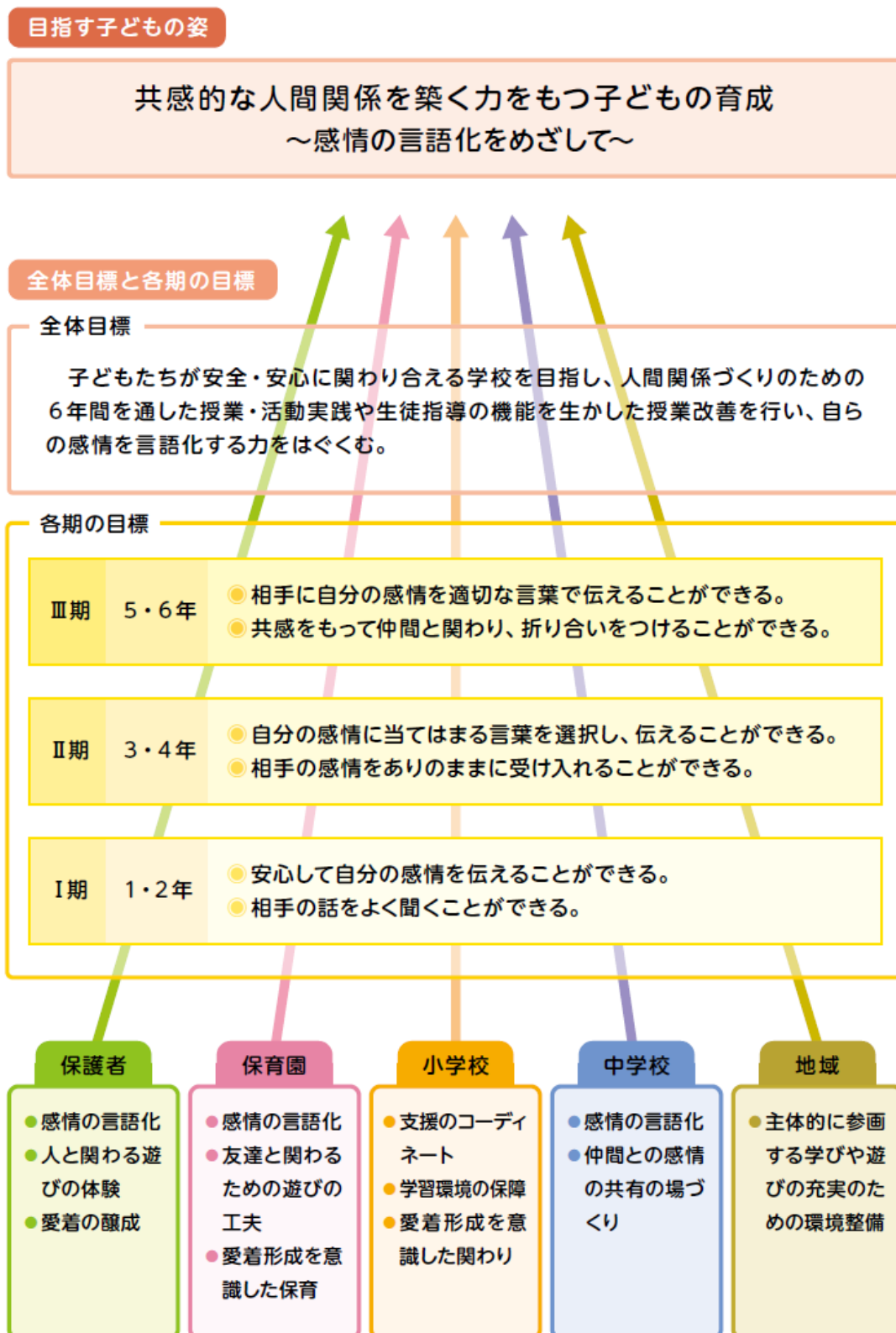
きもちをあらわすことば

1 顔さ				2 動き			
							
おもしろい	つまらない	おどろく	こわいそう	はしる	ねむる	なみだ	はなす
							
おもしろい	かなしい	びっくりする	がっかりする	はなごめる	はなぬ	あわてる	つかれる
							
わくわくする	こわい	どきどきする	ほろこしい	へちま	しんぱい	あはれ	おそろしい
							
うきうきする	こまる	よろこぶ	くるしい	じんぱいあそび	ひびきあそび	たいくつ	あはれ
							
うれい				くたがし	おどろえ		
							

（２）集団への取組

共感的な人間関係づくりのための６年間を通した授業実践を推進するために「大和川スタンダード」を作成した。感情の言語化を目標にし、学級活動の時間を中心として、自分のポジティブ感情やネガティブ感情を理解することや、友達と感情が異なってもよいことを学習する。そして、いずれの感情も自分や友達を支える大切な感情であることを理解させる。

図２ 大和川スタンダード



授業実践

2年 学級活動「みんなのキラキラフラワーを育てよう」 授業者 服部 紫乃

- I期の目標 : 安心して自分の感情を伝えることができる。
相手の話をよく聞くことができる。
- 育てたい態度・資質: 自分のことを理解する力、自分のことを肯定的に捉える力
- 授業の実際

導入 ネガティブな感情の価値付け

授業の導入で、気持ちを表す言葉カードを基に児童から出たネガティブ感情を取り上げて紹介した。子どもたちが出した事例と、気持ちを表す言葉カードを照らし合わせて、うまくいかない気持ちを考えさせた。子どもたちからは、「がっかりした」、「つかれる」など、の事例を自分事とした発言が見られた。

次に、授業者がうまくいかないときの気持ちは必要かどうかを子どもたちに問うと、「モヤモヤもあっていい」という声があった。授業者はそれを認め、ネガティブな感情も自分には大切な感情だと受け止められるように、安心して表現して良いものとして価値付け、授業を進めた。



展開 うまくいかない気持ちの共有、共感的な声かけ

自分の「〇〇したかったのに××できなかった」という、「うまくいかない気持ち」を一人一人が考えた。そして、うまくいかない気持ちを「キラキラフラワーの種」として表出した。授業者の例示を参考として、学級全体で相手の気持ちを受け止め、共感的な言葉や励ましの言葉を伝える練習を行った。

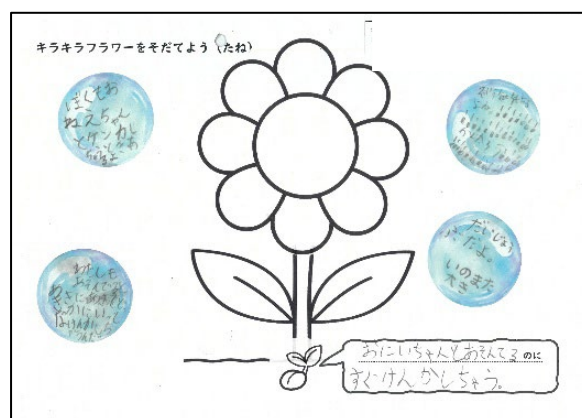
その後、友達の「キラキラフラワーの種」(うまくいかない気持ち)に対して、その気持ちを受け止める言葉をカードに書き、言葉をかけながら渡し合った。



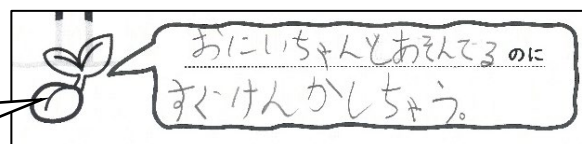
終末 振り返りと今後に向けて

友達から、カードに書かれた共感的な言葉や励ましの言葉をもらってどんな気持ちになったかを問いかけた。子どもたちからは「うれしかった」「自分もこんな気持ちになったことがある」という言葉が返ってきた。ネガティブな感情も友達に聞いてもらい、認められたことで、安心して表現して良いものという認識をもつことができた。

授業者はポジティブ感情もネガティブ感情、どちらも自分の大切な気持ちであるとまとめた。



キラキラフラワーの種



(3) 家庭・地域・学校・園との連携

①職員一人一人の力量形成と指導体制の一本化

愛着の問題を抱える児童は、常識生徒指導が通用しないどころか、間違った指導を行うと関係性が悪化してしまう。そこで、愛着形成研究の第一人者である和歌山大学教育学部教授の故米澤好史様からの講義や事例検討会を実施した。さらに、感情の言語化の理解を図るため、前東京学芸大学の大河原美以先生のビデオ動画を視聴するなどの研修会を複数回実施した。

同時に、共通理解に基づく個別支援の体制整備をより確実にするために、会議室のホワイトボードを活用した迅速かつ緊密なケース会議を行い、個別指導の方向性の確認を行った。このケース会議には、市生徒指導担当指導主事や市派遣の生徒指導支援員、ソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、主治医なども加わった。



②保小中合同研修会の実施

当中学校区の保育園・小学校・中学校では、愛着の問題をかかえる園児・児童・生徒の対応に苦慮している。そのため、それぞれの学校園でベクトルを揃えた取組が必要であるとの認識の下、合同研修会を行った。米澤好史教授のオンライン講演や大河原美以先生の動画を視聴し、その後、グループでそれぞれの学校園での取組について話し合った。



研修会に参加して

- ・保小中の様々な立場の先生方とお話ができて良かったです。5年後、10年後の姿を想像しながら保育園でできることを大事にしていきたいです。
- ・共働きやスマホ依存など、保護者に何かしらの課題があると子どもにも問題が表れると思います保護者の課題にも向き合う必要があると感じました。
- ・中学生にも感情のラベリングは必要で、そのためにも子どもとの関係性を大切にしていこうと思いました。

③小中教員による保育参観

夏期休業中に学区の教員による保育参観を実施した。参加職員は日常の保育の様子を参観するだけでなく、園児の遊びの内容や保育士の支援についての気づきを記録に残した。そして、その記録をもとに、日常の保育の内容について学校職員と意見交流した。この取組によって、小学校職員は次年度以降の児童一人一人の支援の手立て、学級・学校経営のヒントを得た。また、保育園職員も意見交流によって自分の保育の見直しを図ったり、園児への支援方法の改善につなげたりした。



5 研究の成果と課題

(1) 個への取組に関わって

「馬鹿なことをしたと反省している。何であんなことしたんだろうって今なら思える。」——教室で学習することができずに廊下をうろうろしたり、暴言や暴力で友達にちょっかいをかけたりしていた児童が自分を顧みて発した言葉である。他にも、自分の気持ちを暴れることなく言葉で表出できるようになった児童、イライラする前にクールダウンする方法をとれるようになった児童、友達との温かい関わりを求めるようになった児童がいた。

和歌山大学教育学部教授の故米澤好史様から「愛着の修復は何歳からでもできる」とご指導いただいたことを励みに、愛着の問題を抱える児童への関わりを継続してきた。これまで、愛着の問題を抱える児童は、泣いてわめいたり怒ったりするなど、感情を爆発させることがあった。しかし、キーパーソンを中心に、主導権を意識した先手支援、ポジティブ感情を生じる活動の設定、感情の言語化を行ってきたことが、着実な変容につながった。愛着の問題を抱える児童の言動の表れ方や行動を抑制する力の育成の変遷には共通性があり、支援とともにまとめたものが「愛着の問題を抱える児童の様相と支援による変遷」(図3)である。これらの変遷は、順調に進むものではなく、進んだり戻ったりしながら、徐々に適応的な行動が増えることも分かった。肝心なのは、諦めずに支援を継続することである。図3を話し合うための土台とし、個に応じた支援をさらに探っていくことが今後の課題である。

(2) 集団への取組に関わって

以前の児童は、「楽しかった」「うれしかった」などのポジティブ感情のみを表出するべきだと考えている児童が多かった。しかし、ポジティブ感情だけでなくネガティブ感情も自分の大切な感情であることを学び、感情を言語化することに前向きになる児童が増えた。「大和川スタンダード」をもとに、感情の言語化につながる授業実践に取り組んできた成果であると言える。

10月10日(金)に行った生徒指導研究発表会では、お二人の指導者からご指導いただいた。

上越教育事務所学校支援第2課指導主事の草間啓様からは、「間違っても大丈夫」という学級の雰囲気づくりが安全・安心な風土を醸成すること、ポジティブ感情とネガティブ感情の両方を仲間と共有する取組が共感的な人間関係の育成につながることを、当日の公開授業で実際に見られた姿から具体例を挙げて示していただいた。そして、6年間の段階的な指導の重要性をご指導いただいた。

糸魚川市教育委員会こども教育課指導主事の山下太郎様からは、今まで当校の事例検討にも深く関わり、ご指導くださった立場から、取組の成果を認めていただくとともに、発達に障害がある児童と愛着の問題を抱える児童とでは行うべき支援が異なることをご指導いただいた。また、愛着修復プログラムを個への支援だけでなく、集団への支援に生かす有効性についてご示唆いただいた。

お二人の指導者からの指導をもとに、今後も「大和川スタンダード」を基盤とした感情の言語化を促す授業の工夫と日々の集団づくりに努めていく。



(3) 家庭・地域・学校・園との連携に関わって

愛着の問題を抱える児童への対応に関わって、当中学校区の教員同士で悩みを共有したり、共に学んだりする機会をもったことにより、同じ意識で幼児・児童・生徒に対応することができた。連続性のある指導を行うために有効だった。

また、家庭、地域、様々な関係機関に協力を躊躇なく求め、早期対応したことにより、不適切行動を起こさなくなった児童もいた。また、常に職員間で連携し、チームで対応してきたことにより、児童への円滑な支援を行うことができた。

今後は、愛着の問題を抱える児童に対する支援について、保護者への理解をさらに求めていくことが課題である。啓発の方法を検討していく。

図3 愛着の問題を抱える児童の様相と支援の変遷

	心の中がモヤモヤ期	遅れてきたイヤイヤ期	感情の言葉キャッチ期	自他が気になる期
見られる言動	<p>自分の気持ちを どうしていいかわからない</p> <ul style="list-style-type: none"> 無表情・無気力 過剰な身体接触 口に物を入れる 衣服を脱ぎたがる 必要以上に「よい子」を演じる 徘徊 床に寝転ぶ 休み明けの朝に多動が目立つ(月曜日) 週の後半や午後から多動が目立つ(6限はダメ) 	<p>自分の葛藤を様々な言動で表現する</p> <ul style="list-style-type: none"> 大声でわめく 泣く 暴言(「バカ」「死ぬ」「だまれ」「うるせえ」「あっちいけ」「来るな」) 暴力(物を投げる、叩く、壊す、刺す、蹴とばす、噛みつく) 自傷行為 学習放棄 集団からの逃走 過大な要求 高所に登る 大人の顔を見ながら逃げる 	<p>キーパーソンに感情を表出する</p> <ul style="list-style-type: none"> キーパーソンとの約束を守って、集団から離脱する 壁や机を叩いて合図を出す 靴や衣服を脱いで合図を出す トラブルや逸脱行動についてふれられたくない(「その話はしたくない」「思い出せない」「ママに言わないで」) 褒められても素直に受け入れられない(「違う」「そんなことない」) 感情のラベリングに対する受容(「～だったんだね」「うん」) 	<p>ポジティブ感情とネガティブ感情に気付く 友達との関わりを求める</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達と遊びたがる 友達の真似をしたがる 集団への参加ができる 注目行動、逸脱行動が減少する 褒められたいと願う(「先生、見て見て」) 過去の自分の言動を振り返る(「どうかしてた」「過去の過ちだ」) ネガティブ感情を認める
	<p>集団の中での対応</p> <ul style="list-style-type: none"> 1対1の関係性を意識 個別の言葉掛け <p>職員で情報を共有</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者連携(情報共有、方針の一本化) 定期的なケース会議 	<p>職員全員で対応の仕方を共有</p> <ul style="list-style-type: none"> 愛着対応研修を行う 対応を共有する(叱らない・脅さない・おだてないなど) <p>キーパーソンの決定</p> <ul style="list-style-type: none"> 学級担任がキーパーソンとして役割を果たす <p>気持ちを整える環境の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> 別教室や教室内に居場所を確保する トラブル時に気を逸らす支援をする 集団のルールを明確化する 集団から出るときは「戻ってきてね」と言う 戻ったときは「待っていたよ」と言葉を掛ける 	<p>キーパーソン主導による愛着形成</p> <ul style="list-style-type: none"> 学級担任をキーパーソンとして1対1の関係性づくりをする 常に行動の見守り、感情のラベリングをする <p>関係する職員との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 必要に応じてサブキーパーソンを設定する キーパーソンへの情報集約と支援方法を共有する 「こんな支援をしたら、うまくいった!」という情報を付箋に書き、個別の記録ファイルに集約する 関係する職員で情報を共有し、次の支援につなげる キーパーソンの引き継ぎ式をする 	<p>1対1で振り返る時間の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> トラブルがあったときは、クールダウン後に振り返りの時間を設ける 1対1で会話を楽しむ時間を継続する ネガティブ感情を認め、大切な感情であることを伝える <p>キーパーソンによる橋渡し支援</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達との関わりが生まれるような働き掛けをする トラブルが起きたときは、大人が間に入る 
実際の支援		必要な支援を継続して行う		

【引用・参考文献】

- 文部科学省（2023）『生徒指導提要』東洋館出版社
- 大河原美以（2007）『子どもたちの感情を育てる教師のかかわりー見えない「いじめ」とある教室の物語ー』明治図書
- 大河原美以（2015）『子どもの感情コントロールと心理臨床』日本評論社
- 大河原美以（2021）『いやな気持ちは大事な気持ち』日本評論社
- 米澤好史（2015）『「愛情の器」モデルに基づく愛着修復プログラム』福村出版
- 米澤好史（2018）『やさしくわかる！愛着障害 理解を深め、支援の基本を押さえる』ほんの森出版
- 米澤好史（2019）『愛着障害・愛着の問題を抱える こどもをどう理解し、どう支援するか？』福村出版
- 米澤好史（2020）『事例でわかる！愛着障害 現場で活かせる理論と支援を』ほんの森出版
- 米澤好史（2024）『愛着障害は何歳からでも必ず修復できる』合同出版
- 米澤好史（2024）『愛着アセスメントツール 4つのステップで愛着の問題を分析し個別の支援に活かす』合同出版
- 渡辺弥生（2021）『完全カラー図解 よくわかる発達心理学』ナツメ社
- 池谷祐二 監修、クリハラタカシ 絵（2020）『こころキャラ図鑑』西東社
- 上越教育大学付属幼稚園（2008）『平成 20 年度研究紀要 なかまとともに vol. 5』
- 上越教育大学付属幼稚園（2009）『平成 21 年度研究紀要 なかまとともに vol. 6』
- 新潟県三条市立井栗小学校（2012）『平成 24 年度 校内研究のまとめ』
- 新潟県三条市立井栗小学校（2013）『平成 23・24・25 年度 新潟県小学校高幾研究会指定研究（第 3 年次） 生徒指導研究発表会 どの子にも学び合う力と絆をはぐくむ学校づくり』
- 阿賀町立津川小学校（2017）『平成 27・28・29 年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会指定研究（第 3 年次）』
- 上越市立大瀧小学校（2023）『令和 5 年度 新潟県・新潟市小学校教育研究会 指定研究事業 研究紀要』